



書

評

谷口 守 著

『生物から学ぶまちづくり』

室田 昌子*

本書は、都市と生き物は類似しているという前提に立ち、仕組みや論理でつながっているものと見かけが似ているものを含めて、その類似性を指摘したり、都市に当てはめて考えるという方法によって、生物の力を借りて都市の現状や課題に関する理解を深め改善策を考えようとするものである。生き物の持つ優れた機能を人間の生活の取り入れる試み（バイオミメティクス）に都市づくりを位置づけて、ゲデスやマンフォード、ハワードらが成長時代の都市づくりを論じたことに対し、人口減少化時代の都市づくりを論じるとしている。以下、全体を俯瞰することにする。

まずは、生活習慣病ということで、メタボリック症候群と都市の内部脂肪的エリアや皮下脂肪的エリア、高血圧と交通ネットワーク、骨粗しょう症と空き家空き地・未利用地、がん細胞と住宅建て替えによる高層化やタワーマンション化、細胞老化と建物の老朽化、冷え性とバス路線、糖尿病と建設事業やインフラ整備など、実に様々な生活習慣病をあげて、都市問題との関係性を指摘し、課題を論じている。現代の様々な都市の問題点を一種の病気と捉えて、発症している各症状を人間の病気に重ね合わせてわかりやすく紹介している。

次に細胞死を2つに分類して、まずはプログラムされた細胞死（アポトーシス）として、健康を維持するためにあらかじめ計画された細胞死を紹介し、コンパクトシティとアポトーシスの考え方の共通性や、減築やインフラ撤去、都市のライフサイクルの設定、細胞の入れ替えなどをアポトーシスの観点から論じている。また、仮死状態の街をシードバンク（生きた種子が残っている土壌）という点から復活させるということが述べられているが、これをヒントに、現在、消滅地域と言われているような地域でも（そうではない地域でも）、地域にとってのシードバンクは何なのかを考えてみるとよいのではないかと感じた。

もう一つの細胞死とは、壊死（ネクローシス）であり、震災などによる街の消失や破壊を挙げている。ネクローシスから都市を守る方法として、コストとリスクを最小化する居住環境を個人がそれぞれ選択するとあるが、これは、例えば高齢者が健康状態に応じて高齢者施設に住むといったことなのだろうか？また、リダンダンシーの重要性を指摘しており、筆者の指摘するように計画的なりダンダンシーや中枢部分の再生の道筋を平常時から担保しておくことが重要と思われる。また、都市における多様性の重要性としてシンプソンの多様性指数をあげ、ただし多様性とは何をもって異なると規定するのかという問題を提起している。

まちの診断として、カルテづくり、都市ドックや可視化の重要性を指摘している。診断結果に対してアーバントリアージ（治療対象者の優先順位付け）という概念を提示しており、予算が限られるなかで、重視される考え方になると思われるが、何をもって優先順位を決めるのかは重要であろう。

都市の免疫力・再生力の高め方として、適応力の重要性、身の丈に合った暮らし方として負担を最小化しつつサービス水準を高める例、公共交通機関を収支で決定することの非合理性、農地と都市居住者の共生関係づくりなどが提案されている。ストロー効果防止のための交通の半透膜化は発想が面白く、実際の事例がさらに発展することが望まれる。

最後に都市の未来として、既成市街地の中心部が新たなフロンティアになるという指摘は重要と思われ、実際にみかける様々な兆しを一気にメタモルフォーゼ（蛹化）するための方法は何かと考えさせられた。メタモルフォーゼは、不必要となる組織の細胞死と新たに必要となる細胞を再構成する必要があるのであろうが、変態する生物はこの仕組みが予めプログラムされているが、都市は放置しておいても蛹化かもしれない。筆者はネオテニー（幼形成熟）という観点から地方都市や中小都市の可能性を示唆してくれている。中小クラスの大きさの都市やその中心部の多様な人やグループが混然一体化してぶつかるプロセスから新しいカタチが生み出されるのであろうか。

本書は、様々な視点を提示しており、それらをヒントに自分の関心のあるまちの今後を模索することを助けてくれる。多様で柔軟な発想を引き出すうえで価値のある書籍といえるだろう。

株式会社コロナ社 TEL:03-3941-3133

2018年10月10日発行 ISBN:978-4339052602